

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0788 ◆◆◆

24/05/08

【 5月相場、近年は「小動き」目に付くが… 】

すでに終了している4月相場は、月間変動が9.41円(150.81-160.22円)となった。今年の月間最高変動を記録しただけでなく、2022年11月(11.32円)以来の大きさになる。

結果として、大相場の継続が再確認されるなか、月が替わった5月1日以降もそんな大相場が続いている感を否めない。実際、本稿執筆時ここまでの月間変動幅はすでに6円を超えている。経験則からすると、近年の5月相場は値動きの鈍い展開が決して少なくないのだが、当局の動き如何といった面もあるとはいえ、今年は例外的な大相場。2ヵ月連続の大変動を期待する声が少ないようだ。

◎今年「特異年」、2ヵ月連続大相場への期待も

恒例となっている経験則に基づいた見通しを示す前に、まずは星取表を確認しておく、1990年以降、昨年まで34年間の5月相場は18勝16敗となっている。わずかにドル高有利ではあるが、ほぼ互角の結果であり特徴とまでは言えないようだ。

しかし、4月相場と5月相場、単月ではなく2ヵ月続けてみた場合、興味深い事象がうかがえる。それは、「4月相場と5月相場は逆方向に動くことが多い」で、調べてみると2015年以降2022年まで8年連続でパターンに合致していることがわかった。昨年は残念ながら4月、5月とも「ドル高」でパターンから外れたが今年果たして。

ちなみに、今年の4月相場は151円台で寄り付いたのち、終了時は157円台。つまりドル高・円安で終えており、その逆に動くとなれば「ドル安」有利ということになる…。

また、それとは別の5月相場の特徴を調べてみると、昔は「年間を通してかなり荒れ模様の展開を辿ることが少なかった」のだが、近年は逆に「動きの鈍い」展開が目につく。

幾つか例を挙げると、2020年の3月はいわゆる「フラッシュクラッシュ」もあり月間で10円以上も動いたのち、4月が3.01円、5月は2.10円と変動幅が急縮小。翌2021年の5月は月間変動幅が1.86円で年間を通し最小変動幅だし、2022年も月間変動幅は4.99円に過ぎない。後者は1-3月と比べてさすがに動いたものの、「月間変動幅平均8円強」というなかでは異質とも言える小動きにあたる。一部の市場筋からは、「研究され尽くした結果、逆張りする人が多くなった」といったような見解も取り沙汰されていた。とは言え、前段で指摘したように、今年の5月相場はすでに6円以上と、なかなか大きな変動を記録している。ヒョツとすると、過去の経験則が当てはまらない特異年であるのかもしれない。

一方、過去の事象、ニュースなどを振り返った場合、5月は国際的な重要な出来事が多発しているが、そのなかでもとくに注目には値するのはロシアはともより、北朝鮮情勢に関する要因だろうか。

うち、後者でいえば、2018年は「北朝鮮による、いわゆる『瀬取り』行為が公式に初めて確認される」、「トランプ米大統領が直前になり米朝首脳会談の破談通告(紆余曲折を経て、結局予定どおり6月12日に実施)」などが5月の出来事だったし、翌2019年は5月4日にその年初めての「飛翔体」を発射。以降9月10日までの約4ヵ月間で10回、少なくとも20発以上の短距離弾道ミサイルが打ち上げられることになるキッカケとなっていた。

そうしたなか、今年5月に決定している重要なイベントと言えばイタリアで開催されるG7財務相会議ぐらいいかない。とは言え、北朝鮮が昨年に続き軍事衛星の打ち上げを予定しており、一部の米シンクタンクによると「早ければ5月中にも実施される」見通しだという。また、岸田首相が早期の日朝首脳会談開催に意欲を示しているとも伝えられており、先行きが気掛かりだ。

さらに北朝鮮以外では、様々な思惑が交錯して決して簡単ではないものの、イスラム組織ハマスが、カタールとエジプトの仲介役に対し停戦案を受け入れると伝えたことが明らかになり、すでにイスラエルの対応次第といった様相だ。いますぐに、といったことではないにせよ、月内に大きな進展。たとえば歴史的な停戦合意などが結ばれる可能性もないではない。期待も込めて、早い段階で国際情勢がポジティブな方向に進むよう、しっかりと見極めたいと思う。(了)

